

琉球大学学術リポジトリ

学校とよのなかをつなげる力の実践～沖縄県における活動を中心に～

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2011-08-16 キーワード (Ja): キャリア教育, よのなか科, 学校支援地域本部, コーディネーター, 学社融合 キーワード (En): 作成者: 東濱, 克紀, Higashihama, Katsunori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21607

学校とよのなかをつなげる力の実践

～沖縄県における活動を中心に～

Connecting the Schools with the World by Sharing Real Experiences: From the Activities of Okinawa

東 濱 克 紀*

キーワード：キャリア教育、よのなか科、学校支援地域本部、コーディネーター、学社融合

I. はじめに

現在、時代は大きな転換期を迎えている。社会のグローバル化と、日本だけでなく世界が競争社会化・知識社会化するなか、沖縄では全国学力テストで最下位という結果になってしまった。また近年、ニート・フリーターの増加に伴い、キャリア教育の重要性が叫ばれている。子ども達の抱いている夢をどのように実現させていくのか。教師・親・地域の大人との交流を通じて、子ども達は将来の目標を定め、学習意欲を高めていく。子ども達が自らの目標を定め、それに向かっていくときに力は最大限に発揮されると私は考える。

現代社会では、インターネットが普及し、ITを通じたデジタルコミュニケーションが中心になっている。インターネットは人々の生活を便利にしたが、このような時代だからこそ、人と人との交流があり、心の通った家族や友人、地域との交流が重要だ。この交流が将来を担う人材を育て、社会を作り、未来の沖縄を担う子ども達を育てる教育だと考えている。

このような社会環境で対話が教育現場に求められるなかで、学校・家庭・地域社会が連携するための仕組みづくりや、地域教育力の向上を図る具体的な取り組みは地域に浸透しつつある。今回は「つなげる」というテーマで私が関わった浦添市、南風原町、那覇市での取り組みを紹介していきながら、「いかにして、学校（生徒）とよのなか（地域、社会、世界）をつなげるか？」を考えていきたい。

II. つなげる力

学校現場の課題を「つなげる力」を用いて実際に解決した事例が東京都杉並区立和田中学校にある。学校現場では、一週間の始まりであるはずの月曜日の朝がいちばん、学校の空気がどよんとしている。子どもたちは覇気がなく、反応が鈍い。それは子ども達を土曜日に放っておいて学校に来させないでいると、生活習慣がすっかり乱れてしまうことが理由である。土曜の晩から日曜日にかけて同じようにダラダラしていると、月曜日に学校に来て午前中はボーっとしているだけ、ということになる。

こうした生活習慣の乱れは、基礎学力の定着に影響する。この課題を解決するために、土曜日の午

*学校法人興南学園・興南高等学校教諭

前中だけでも、学校に来れる子どもたちを集めて、自主的な学習の場をつくりたい。誰かがわからないところを教える役をつとめて、土曜日の学習会のようなものを立ち上げるのはどうだろうか。さて、誰がやってくれるだろうか。教員に頼むのは酷である。授業の準備もたいへんだし、部活動の指導をしている先生は、土日に練習や試合が入る。さて、誰に頼んだらいいのだろうか？

この正解のない問題を、和田中学校では「大学生と中学生をつなげる」ことで解決した。土曜日の午前中、部活のないたいいていの中学生は暇になる。その中学生を学校に集めて学習会を開催した。生徒だけ集めてもおしゃべりタイムになるだけであるから、そこに、教員志望の大学生を中心にした大人のボランティア集団をからませたのだ。

大学生ボランティアにとっては、中学生を学校の教材に即して直接教えられる機会になる。生徒にとっては疑似的なお兄さん、お姉さんとの関係ができるからうれしい。大学生たちにとっては修業の機会として、またとない場になる。教員にとっても、土曜に生徒と馴染みになっている若手のスタッフがインターンとして研修目的で下働きにきてくれることは大きな助けになる。このように「つなげる」ことで、一つ大きな問題が解決した。

学校現場の課題だけに限らず、実際に現代社会のさまざまな問題は、「つなげる」ことで解決していくことが可能である。「つなげる」ことでまったく新しい地平が見えてくる。それは学校の現場でもビジネスの現場でも同じである。

III. 地域とのつながり

1. 浦添市での取組み

2008年11月、浦添市立中央公民館の主催で「公民館子どもフェスタ」が開催された。公民館を中心に地域の商店の協力を得ながら、県のグッジョブ運動とも連携したキャリア教育に取り組んだ。また2009年2月には浦添市教育の日関連事業「まなびフェスタ浦添2009」の一環で、東京都杉並区立和田中学校前校長の藤原和博氏を招き教育講演会を開催した。また街づくりの核となる人材を育てることを目的として浦添市が創設した「てだこ市民大学」の地域・学校支援コーディネーター養成学部では、学校と地域をつなげるコーディネーターの育成が行われている。

(1) 公民館子どもフェスタでの授業 「公民館」×「商店街」×「中学生」

浦添市立港川中学校の生徒を対象に、地域・行政との協働で「公民館子どもフェスタ」が開催された。その事前学習として、キャリア教育の「よのなか科」のワークショップを開催し、商店街の事業所でのお仕事体験などが行われた。「よのなか科」の授業で子ども達は、身近な存在のハンバーガーを題材に、原価や輸出入の問題から円高・円安が起きる仕組みを学んだ。また付加価値について考える授業では、大道芸のクラウン・ブンブン氏をゲストに招き生徒と一緒に考えた。

セミナーの後は、公民館の広場に設置された屋台で、子ども達が手作りをしたパンやそばを自ら店頭で販売。世の中の仕事の仕組みを座学と体験で学ぶ、地域ぐるみのキャリア教育が行われた。

(2) 学びフェスタ浦添2009 藤原和博氏講演会 「教育委員会」×「NPO」×「民間校長」

浦添市教育の日関連事業「まなびフェスタ浦添2009」の一環で、教育講演会「沖縄から日本の教育を変える」が浦添市こども文化連盟太陽樹、NPO 沖縄学力向上の会の主催で、2009年2月21日、浦添市社会福祉センターで開催され、学校関係者や保護者ら約250人が参加した。東京都杉並区立和田中学校の前校長で、大阪府知事特別顧問の藤原和博さんが「民間校長の和田中改革、大阪の教育改革、そして日本の教育改革へ」と題し基調講演した。

和田中や大阪府で実践している地域を巻き込んだ学校教育の在り方について話し「お金や経験、知識を持った団塊世代が、これから沖縄に来て第二の人生を歩み始めることが予想される。沖縄こそ団

塊の人たちを子どもたちにつなげていける唯一の県かもしれない」と伝えた。

(3) てだこ市民大学 「行政」×「地域住民」×「学校」

街づくりの核となる人材を育てることを目的として浦添市が創設した「てだこ市民大学」の地域・学校支援コーディネーター養成学部では、学校と地域をつなげるコーディネーターの育成が行われている。学校と地域をつなげるコーディネーターの必要性は求められているが、その必要な人材を地域で育成していく取り組みは今まで浦添市では行われていなかった。地域・学校支援コーディネーター養成学部では、てだこ市民大学の運営委員をしている昭和薬科大学附属高校教諭の森弘達氏を講師に、県外の学校支援地域本部の取り組み事例や地域人材を活用するネットワーク型授業「よのなか科」の授業の紹介が行われた。学校と地域をつなげるコーディネーターを目指す受講生からは、中学や高校の現場の教師から直接話が聞けて、貴重だったという感想があった。

2. 南風原町での取り組み

私の住む南風原町では学校支援地域本部事業を行い、私も学校支援地域本部事業実行委員会の委員として参加している。また、南風原町立翔南小学校では2007年から地域の方々にも学校にかかわってもらえるように「PTA 賛助会員制度」を創設した。この制度は学校に子どもがいなくても、また町外の方でも翔南小学校 PTA 活動の考えに賛同する方を登録する制度である。これまで、環境教育やキャリア教育などで賛助会員が授業に参画してきた。生徒の保護者の他の地域住民や大学生の支援を取り入れる活動を行っている。

(1) 地域住民を巻き込んだ授業 「先生」×「保護者」×「地域住民」

PTA 賛助会員制度発足から3年目を迎え、4年生の先生から「2学期の授業展開に協力してもらえないか」と相談があった。この授業のテーマは、「平和教育・他者理解 世界の子どもたち」。地域の人達をゲストに招き PTA でコーディネートして授業を展開した。日頃から貧しい国への援助や、子ども達の教育支援に取り組む地域住民を招き、教員だけではなく、「先生」×「保護者」×「地域住民」のコラボレーションで授業が行われた。

講師を担当したのは、翔南小学校 PTA 会長の前城充さん、アジアの貧しい子ども達を支援する活動を行っている照屋盛夫さん、南風原町学校支援地域本部事業実行委員会委員の東濱である。授業の始めは「お金」の話からスタートした。小学校の頃の体験談でアルミ缶を売って部活に必要なサッカーのユニホームを購入したことを紹介した。「アルミ缶を売って自分の欲しいものを買っていたけど、世界には自分の生活のためにお金を稼いでいる子ども達がいる」という話をした。その後、前城さんがフィリピンのごみの山「スモーカーマウンテン」の実態を紹介する DVD を生徒達に見せて、「学校に行けず働いている子ども達がいる」と説明した。最後に、カンボジアで靴を送る活動をしている照屋さんが体験談を報告し、たくさん子ども達が病気で死んでいること、「生きること、学校に通うことを夢にしている」子ども達がいることを紹介した。

授業の最後の生徒の感想を聞いたりまとめたりする役割は、普段から授業を受け持つ教師が担当した。授業を受けた子ども達は、「世界の友達を救いたい」という思いから、3カ月間でペットボトルのふたを5万個以上集めて琉球ジャスコに寄贈した。ペットボトルのふたはリサイクルを通して換金され、世界の子ども達へワクチンや筆記用具が送られる。授業の後、「一人一人が世界のために何ができるのか」を考え、ふた集めの活動を始めた。授業を企画した教師は「身近な人が話すから、子どもたちの心に響く。教師、保護者の壁を超え共同で取り組む。これも平和の一つだと実感した」と話した。

(2) 地域住民を巻きこんでの勉強会 「学校」×「地域住民」×「県外沖縄出身者」

東京都杉並区立和田中学校で「地域支援サポーター」として子ども達の学習支援や学校運営に携わる沖縄県出身の浦崎雅代さんを招いた勉強会「いかにして子どもたちとの『ナナメの関係』を豊かにできるか」を翔南小学校PTA主催で開催した。学校支援地域本部事業は地域住民の学校参加をコーディネートし、教育の充実を目指しているが、杉並区立和田中学校がモデルになっていて、浦崎さんは地域支援サポーターとしてかかわった事例を紹介した。

「学校では、親と子、教師と生徒という力関係のある縦の関係だけでなく、お兄さん、お姉さん、おじさん、おばさんなど地域の人々を取り入れたナナメの関係が子ども達には必要。地域の人々が授業に入ること、先生一人だけでなくさまざまな目線を入れることができる」という利点を紹介した。

3. 那覇市でのとりくみ

那覇市にある興南中学校では、学校（生徒）とよのなか（地域、社会、世界）をつなげる「よのなか科」の授業を2009年より行っている。ここでは、「よのなか科」の授業の取り組みを紹介する。

(1) 今までにない新しい沖縄ツアーを企画 「中学生」×「観光」×「旅行会社」

興南中学校の1年生の「よのなか科」の授業の一環で、約2週間かけて「今までにない新しい沖縄ツアー」を企画した。家族3世代が楽しめるツアーや、不思議な力が満ちるといふ場所へ案内するツアーなど、さまざまなアイデアを発表した。生徒たちは5～6名のグループに分かれて、商品価値のあるツアーを考えた。校内選考を経て、最終審査では6組がプレゼンをした。審査員には県観光教育研究会（会長・東良和沖縄ツーリスト社長）など県内の観光業の人達があつまり、最優秀賞を得たメンバーには、賞状が贈られた。

最優秀賞グループの発表内容は、「3世代で沖縄を訪れる観光客が少ない」ことに着目し、1泊2日の「沖縄ハッピーツアー」を提案した。両親は瀬底島で「何もしないぜいたく」を味わい、子どもと祖父母は沖縄美ら海水族館で遊び、宿泊する内容である。「このツアーでしかできない体験で一生の思い出を」とアピールした。授業に参加した生徒達は、ホテルに直接電話するなどしてリサーチした。「観光についてもっと学びたいと思うようになった」と感想を話していた。

(2) 夢への投資について考える 「小学生」×「中学生」×「興南高校野球部」

小学生向けの体験授業「ハイサイ教室」にて、甲子園で春夏連覇を果たした興南高校野球部を招き、小学生と中学生と一緒に将来の夢をかなえるために今できる自分への「投資」について考えた。興南野球部からは、投手の島袋洋奨君ら8人に加え、我喜屋優監督が飛び入り参加し、体験を語った。

甲子園を目標にコツコツと投資を積み重ねてきたという島袋洋奨君と山川大介君は、清掃活動や厳しい練習に汗を流した日々を振り返る中、「友達と遊べる時間がなかった」と本音をこぼした。

それでも甲子園という目標の先を見据え、日々グラウンドに向かったという島袋洋奨君は、甲子園がゴールではなかったといい、「将来は野球を通して学んだことを次の世代に伝えていきたい」と言葉をかみしめた。

授業を担当する門林良和教諭は「野球が終わってもこのスコアボードは続く」という我喜屋優監督の言葉を紹介し、目標は一つの道しるべで、目的は到達点だと強調。看護師や警察官など、それぞれが目指す先に人生の目的があるとし、「自分自身へ今どんな投資ができるのかを親子で語り合ってほしい」と“宿題”を出した。

スポーツ選手になるのが夢という参加した小学生は、「夢はいっぱい。でも目的まで深く考えたことはなかった。ちょっと難しかったけど、新しい発見になった」と感想を話した。

(3) どうする生徒会！？生徒会長選挙でラジオ討論 「生徒会長選挙」×「大学生」×「ラジオ」

沖縄県知事選を前に、若い世代の選挙への関心を高めるために活動している学生団体「知りたがりism」（野中光代表）と興南中学校は、中学校の生徒会長選挙に立候補した生徒8名による討論会をFMレキオで放送した。放送局スタジオで収録を行い、候補者が生徒会の運営について議論した。身近な選挙を通し、未来の有権者に政治への関心を高めてもらうのが狙いである。

収録で8人の生徒らは「学校周辺の清掃などボランティア活動を増やす」「目安箱を設置し、生徒の意見を生かしたい」と公約を発表した。「学生生活が楽しくなるようにしたい」などと将来像を描いた。

司会を務めた「知りたがりism」の知念幸見さん（琉球大学4年）は収録で「生徒たちの熱気が伝わった。大人たちも中学生に負けないよう知事選に向けしっかり考え、大切に一票を投じて」と聴取者に呼びかけた。同じく司会を務めた生徒会役員の3年生は「国や県にもものを言える唯一の機会が投票。20歳になったら人気投票ではなく、しっかり政策を見て投票したい」と語った。立候補者の1人で、収録で「全校生徒にアンケートし、意見を生徒会運営に反映させたい」と公約した生徒は「会長に選ばれたら、公約をしっかり実行しなければならないという責任を感じた」と語った。討論は2010年11月23日の18時、FMレキオの番組「ゆるやかネットワークをつくろう」で放送された。学生らは討論会の内容を踏まえ、興南中学で政治に関する模擬授業を行う。

(4) 主体性について考える 「中学生」×「大学生」×「県知事選挙」

授業は県知事候補者へのインタビューなどに取り組んでいる学生団体との共同企画で行われた。学生団体代表の野中光さん（琉球大学4年）は「無関心でいればいるほど、こうなってほしいと思う社会は遠ざかっていく。主体的に一步、動くことが大切」と生徒に呼びかけた。

生徒会の会長選挙を控えた生徒たちに、県知事選についても意識してもらおうと、若者と政治を近づける活動に取り組む「知りたがりism」と興南中が考案し、2、3年生60名余りが授業に参加した。

「生徒の髪は、男子は長さ1センチまでとし、女子は必ず2つに結ぶこととする。靴下はひざが隠れる長さで色は白。授業中はいすの上に正座することとする」。授業の冒頭、職員会議で決まったという架空の「校則改訂のお知らせ」が配られると、企画を知らない生徒からどよめきが起った。生徒にアンケートをしたところ、大多数は「気に入らないので徹底的に反対する」を選択した。理由は「納得いかない規則は守りたくない」「大人がやらないことを子どもにやらせるべきではない」などだった。中には「一人では無力。先生の前だけ守る」「少し訂正するように頼んでみる」との意見もあった。「生徒にアンケートをして反対が多いことを証明し、親からも署名を集めて学校に見直しを迫る」とする生徒もいた。

教師は校則変更が架空の設定だったことを明かし、「知らない所で物事が決まらないようにするにはどうすればいいか」と提起した。野中さんは、政治や生徒会にかかわりをもたなければ煩わしさもないが、知らない間に迷惑なルールができあがってしまうと説明した。

参加した生徒は「不満を持っている人と手を組んで、ぶつけていくことが大切だと思った。将来は、候補者が何をどう変えたいかを見極め投票したい。選挙は一番、国民の意見が反映される制度だと思う」などと感想を話した。

(5) 知事にプレゼン 「中学生」×「テレビ」×「沖縄県知事」

平成23年元旦、琉球放送テレビにて、「知事にプレゼン！～沖縄の明日を描く若手たち～」が放送された。その中で、沖縄の様々な分野の現場で活躍する若手・学生の皆さんが、仲井真知事に明日の沖縄を盛り上げるべくプレゼンテーションを行い、知事がそれに答える（応える）という新しい試みが行われた。

この番組の中で、興南中学の生徒から出された仲井真知事への提案が「グッジョブ運動の取り組みとして、中高生に向けた県内の優れた企業を紹介する広報誌を作って欲しい」というものであった。県内にも、数多くの産業で興味深い仕事があることを伝え、県外へ進学する学生にも卒業後県内で活躍できる場があるんだということを発信してほしいという提言である。知事も、この提案に対して「いいですね、すぐやりましょう！」と即答した。以下は放送された知事とのやり取りである。

「知事にプレゼン！～沖縄の明日を描く若手たち～」

司会：二期目をスタートさせたばかりの仲井真知事をお招きして、県内のさまざまな分野で活躍する若手のみなさんに、これからの沖縄についてプレゼンしてもらおうという特別番組をお送りしています。続いてのプレゼンのテーマはこちら「教育」です。それでは、教育現場から知事にプレゼンです。

東濱：私は今、興南中学校という学校で「よのなか科」という授業をやっているんですね。知事、「よのなか科」をご存知ですか？どのような授業かというのを、実際知事にも体験してもらおうと思い、実際に授業をやっているような形で進めていきたいと思えます。今日は本当だったら生徒全員連れてきたかったですけれども、中学生達が日頃どのような事を思っているのか知事に質問・提案したいと思って元気のいい二人を連れてきましたので、よろしくお願いします。

女子生徒：私は興南中学校の生徒会長なのですが、知事と同じ時期に生徒会長選挙がありまして、8人の激戦のなか見事当選しました。そんな私が思う疑問というのは、「私達中学生はなぜ勉強しているのか？」ということです。「世の中で役に立つ知識だけを勉強すればよいのではないか？」と私は思うのですが、その辺を仲井真知事に聞きたいと思ひまして、質問しました。

仲井真知事：それでいいんじゃないですか？ただし自分の欲求がですよ、それだけでは足りないはず。あれもこれもやってみたい、遊びたいから始めて、おそらくものすごい欲求が身体の中にあるはずですから、役に立つものだけではかなり足りないような予感がしますがね。ただしそれだけやれば十分ではありますよ。おそらく。なんか答えになってるかな？

男子生徒：僕からの提案なのですが、仲井真知事が進めておりますグッジョブ運動で、もっと県内のこういうところにはこういう面白い企業があるんだよというのを、紹介する広報誌を定期的に発行したら、沖縄県は面白い職業があるんだなと紹介したら、沖縄がもっといいところいなと思うのですが。

仲井真知事：いいご提案ですね、そうしましょう。発表しましょうね。山のようにあるからね。ただし沖縄も小さい島だから、世の中は無限の面白味がありますけどね。沖縄にだって深く入っていけば、一つ一つが無限の面白味があるでしょうし、広く浅く紹介する方法もあるしさ。ただ沖縄以外にも山のようにあるのも確かですよ。取り急ぎご提案として、沖縄のはやってみましょうね。

男子生徒：ぜひともお願いします。

東濱：いま実際に中学生から質問をうけてみてどうですか？答えのない質問で困ったのではないですか？実際「よのなか科」という授業では、学校と地域をつなげるということをやっています。普段教科書だけで勉強するのだと、答えが決まっていますよね。ですが、いま中学生の迷っていること、悩んでいることには答えがないですよ。

仲井真知事：答えはないか、何回も迷うしかないですよ。迷えばいいのよ。おそらく。

東濱：そういう意見はどこから出てくるかという、普通の学校の教室のなかとか親からでは出てこないですね。なので、学校と地域をつなげたり、例えば学校と観光をつなげたり、学校と農業をつなげたり、そういういろんなことをやっていけば、生徒の気づきにもなって、また知事の方にも新たな気づきになるかもしれないですよ。

仲井真知事：学校とですね、学問の世界があるでしょ。ずっと哲学的に宇宙の果てまでいくような。

学問ともつなげて下さいよ。学問というのは学校を出ると薄れるところがあるけれど、学問というのは面白いと思うわけです。極めてインタレスティングな世界ですよ。世の中に学問というのは敬遠的になるから、ぜひ先生入れて下さい。

東濱：わかりました。ぜひ知事の方も、いろんな大人の人達を授業に呼んでいるんですね。それでぜひ知事が見てきたこととかですね、海外とかもいろいろ見てきたと思いますので、自分の思っていることなどを直接中学生に語りかける場というのを作って頂けたらと思っていますので、ぜひよろしくお願いします。

仲井真知事：わかりました。

司会：どうですか知事？中学生のストレートな質問というのは？県議会の追及より厳しいのがあると思いますが。

仲井真知事：やっぱり切り口が違うから、非常にフレッシュですよ。

司会：しかし先生、「つながる」「つなぐ」というのは、非常に重要な要素ですよ。

東濱：そうですね。私達は普段中学生と接しているところがあって、「いかに世の中とつなげるか」というのを強く感じたりするんですね。「どうつなげていくか」というのが大人の役割かと思っています。

司会：コーディネートは行政の大きな役割ですから。

仲井真知事：僕も機械工学を勉強しようと思った理由の一つはね、鋳物工場を50年前の小学校の時に見学に行った時なんですよ。だから世の中をどんどん見せた方がいい。あるいはつないだ方がいいですよ。

司会：つながることで、逆に迷いも増えるかもしれないけれど、頑張ってもらえたらいいと思います。

仲井真知事：楽しみもあると思うから頑張ってください。

(6) 沖縄の未来はみんなでグッジョブ！

琉球放送「知事にプレゼン！～沖縄の明日を描く若手たち～」の放送後、中学生と教師と沖縄県庁のグッジョブ室職員とで意見交換を行った。県としても広報誌などを使いグッジョブ運動を展開しているが、もう少し若い方々への浸透に課題があるという。そこで「みんなでグッジョブ運動をもっともっと中高生に伝えられるようなアイデアを、中学生に考えてほしい」という依頼を受けた。

そこで、2011年1月20日、興南中学3年生の「よのなか科」の授業で、「沖縄の未来はみんなでグッジョブ！」と題する授業が行った。県の進める「グッジョブ運動」を中高生にも広めようと、県の担当者にアイデアを提案した。「CMと連動したグッジョブ運動のテレビ番組を作る」、「文字が多いと読まないの、グッズに書く言葉は一言にする」など、さまざまな意見が出た。

五つのグループに分かれ、企画名や内容、PRポイントを話し合った。5分程度の短編ドラマ製作や、中高生が使うペンや下敷きでアピールするなど、積極的に意見を出した。知事にプレゼンした生徒は「自分のつぶやきを、県が拾ってくれてうれしい。クラスで話すことで、考えつかない意見も出ておもしろい」と、授業を楽しんだ。

県観光商工部の下地誠さんは「おもしろいアイデアばかり。知事に提案を伝えて、広報に役立てたい」と話した。

IV. おわりに

本論では「つなげる」というテーマで、浦添市、南風原町、那覇市で私が関わってきた取り組みを紹介してきた。取り組みの中では「学校」「生徒」「教師」「保護者」「地域住民」「行政」など、それぞれ異なる立場がつながることで、新しい価値を生み出してきた。

新しい価値とは、 $1 + 1 = 2$ ではなく既存の価値以上の成果を生み出すことである。つまり $1 + 1 =$

∞の可能性が生まれることだ。中学生と大学生や地域の住民を同じ教室の中で学ぶ場を作ることで、お互いに今まで気づけなかった学びにもなる。しかし、どのように学校の中に外部の人材を入れるかが今後の課題になる。私は学校の教員をする前に地域活動にかかわったり、NPO 団体で働いた経験があったために学校と地域をつなげることができた。今後は学校と地域をつなげるコーディネーターの役割がより必要になると考える。その為に学校と地域をつなげるコーディネーター機能を学校にどのように設けて、定着させていくことができるかが次の課題だ。今は個人の教員の力量や、文部科学省の予算のする事業に頼っている部分があるが、公立学校の場合コーディネーターの役割を果たす教員が移動になったり、文部科学省の予算が無くなった時点でコーディネーター機能を失ってしまう。コーディネーター機能を継続させる仕組みは具体的にまだ分からないが、沖縄の教育に関わる方々と今後一緒に考えていきたい。今はコーディネーター育成事業などに予算をつけてコーディネーターを育成しているが、予算をつけて新しい仕組みをつくるだけでなく、既存の仕組みを組み合わせる新しい価値を生み出すことができるのかもしれない。例えば県や市町村にある社会教育委員制度をうまく活用してコーディネーターの仕組みをつくるのもいいかもしれない。または教育実習にくる大学生は3週間程度の実習期間であるが、大学生のやる気があれば継続して週に1日程度学校に来てもらい、大学生と学校をつなげるコーディネーターの役割を任せることも可能ではないか。

教育の問題だけでなく、社会には解決しなければならない課題がいろいろある。学校（生徒）とよのなか（地域、社会、世界）がつながることで、生徒達が自分の将来を描き成長していくことを願いたい。主体的に社会に関わることで、沖縄の将来を担う人材が育っていくことを通じて、これからも教員の立場から地域づくりに関わっていきたい。

【参考文献・資料】

- グッジョブプレス vol. 2 地域ぐるみのキャリア教育：浦添市の中学生が世の中の仕組み学ぶ
- 藤原和博『つなげる力』文藝春秋社、2008、10-16頁
- 琉球新報 2009年2月25日24面 地域ぐるみの教育を 団塊世代の貢献期待
- 沖縄タイムス 2009年9月8日23面 学校支援いよいよ始動
- 沖縄タイムス 2009年9月15日27面 世界の貧困実態知る 住民招き平和教育
- 沖縄タイムス 2009年12月13日25面 集めた「ふた」5万6314個 世界の友達救いたい
- 沖縄タイムス 2009年12月29日14面 子に「ナナメの関係」必要 地域の人が授業支援
- 琉球新報 2009年12月31日21面 子どもの力信じて 地域人材活用で講演 南風原
- 沖縄タイムス 2010年3月24日31面 興南中1年生 新ツアー企画
- 沖縄タイムス 2010年11月18日27面 夢へ「投資重ねて」興南野球部小学生に授業
- 琉球新報 2010年11月18日25面 どうする生徒会！？ 8候補がラジオ討論
- 沖縄タイムス 2010年11月26日28面 意思表示大切さ学ぶ
- 沖縄タイムス 2011年1月21日25面 中高生狙い提案続々 グッジョブ運動